

# ふつうのフェミニスト？

松永 典子

## 1. はじめに

2019年現在、#MeToo Movement に代表されるように、英語圏ではフェミニズム流行の兆しを感じられる。あたかもフェミニズムがふつうのこととして受け止められているかのようだ。しかし、その一方で21世紀の世紀転換期には、フェミニズムが終わったとされるポストフェミニズム言説が盛んであったことも記憶に新しい。そもそも20世紀初頭のフェミニズムを、第一波フェミニズムと最初と呼んだのは、米国の第二波フェミニストたちである。教科書的に整理するならば、政治的権利を求めて戦った第一波に対して、同一賃金など社会的制度に対して異議申し立てをおこなったのが、第二波とされる。彼女たちフェミニストたちの運動とは、たとえば普通選挙権の要求に典型的に表されるように、その当時の基準からすると普通ではない(extraordinary)と思われることを、普通(ordinary)の人びとに普及させることだった。つまり、彼女たちのもとめたのは、流行ではなく「ふつう」だった。

本発表では、20世紀のフェミニストたちの「ふつう」を求める運動のプロジェクトの中断を、第一波のムーブメントの後の世代である1930年代の女性作家(Virginia Woolf と Q. D. Leavis)の作品と、そのテキストを分析する第二波世代の批評(Elaine Showalter の *Literature of Their Own*)から、二つの世代の女たちの意識を分析した。とくに、第二波フェミニズムが冷戦期に誕生したことに注目し、女たちの(後述する)「冷戦意識」を考察することによって、イギリスとアメリカ、批評と文学、などの緊張関係とともに、第一波、第二波、ポストフェミニズム言説を総体として理解する可能性を試みた。以下にその概観を記す。

## 2. 冷戦期にイギリス文学を読むフェミニスト

近年、冷戦の文脈から文学、とくにイギリス文学を分析する試みがなされている。アメリカ文学と比較するとイギリス文学における冷戦研究はジャンルとして新しい。この分野の批評を牽引するのが、Andrew Hammond である。Hammond は論集 *Cold War Literature* を2006年に編集し、2013年には *British Fiction and the Cold War* という単著においてその概略をまとめている。また、日本では2017年に麻生えりかが *Studies in English Literature* で Hammond を書評するとともに、『ヴァージニア・ウルフ研究』にて「孤独な執事の旅行記——冷戦小説として読む Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day*」(2018)を発表している。一般的に冷戦とは、第二次大戦後の1945年以降ベルリンの壁崩壊までの1989年までの東西間の国際的対立を指すが、これらのイギリス冷戦文学の批評的特徴は冷戦の直接的描写を必ずしも求めないところにある。Hammond が注目するのは、当時の人びとの「冷戦意識」を描いた小説である。彼の言う冷戦意識とは、①漠然とした核やスパイへの恐怖と不安だけでなく、②ポストコロニアル小説やポストインペリアル小説で露呈される帝国へのノスタルジーにも似た、きわめてイギリス的な意識である。これら Hammond の冷戦意識の二つの側面に加えて、麻生は、ベルリンの壁崩壊の1989年に発表された *The Remains of the Day* を冷戦小説として読み解き、労働者階級でありながら中産階級のように描写される Ishiguro 作品の孤独な語り手に③冷戦期に構築された格差社会の犠牲者の不安を読み取る。

核やスパイへの漠然とした恐怖や不安、帝国へのノスタルジー、格差社会の不安。これら三つの冷戦意識は、フェミニズム批評および文学においても重要である。とくに、冷戦における格差社会の犠牲者という麻生の指摘は、冷戦が、男性稼ぎ手モデルをデフォルトとした福祉国家から新自由主義的経済への転換期であったことを示唆するという点で重要である。また、Hammond は、冷戦を、1945年からキューバ危機の1962年までを第Ⅰ期、キューバ危機後、東西両国の緊張緩和が図られた60年代後半から70年代後半までの第Ⅱ期のように、二段階に捉える。後者が第二波フェミニズムの発展と同時期であることを考慮すると、冷戦意識が第二波フェミニズムの文学や批評の書き手や読み手にも共有されている可能性を考えるべきだろう。

冷戦意識をフェミニズム文学において考察するにあたって、Hammond や麻生の議論に加えて考えたいのは、文学の書き手だけでなく、批評家らイギリス文学読者の意識である。イギリス女性文学批評において、*Signs* などの北米の学術誌および米国を中心に発展した女性学が果たした役割は大きい。そうした米国発の女性文学批評の一つとして、米国の Elaine Showalter によって書かれた *Literature of Their Own* をここでは考察する。まず *Literature of Their Own* が出版されたのは、女性作家の手紙や日記などの編纂もされていなかったフェミニズム批評黎明期の1977年であるが、Showalter が本書を英国でのリサーチをしながら執筆したのは1973年だった。

それは、石油の国際価格が上昇する中、賃金抑制施策をとった労働党政権の政策に反対した炭鉱労働者たちによるストライキが起こされた年でもある。一連のストの結果、野党保守党・イギリス産業連合の圧力を受け、労働党政権は、国際通貨基金（IMF）に助けを求めた。IMFからの借款を受ける代償として、労働党政府は、公共支出を大幅に削減することになった。いわば、*A Literature of Their Own* は、イギリスが新自由主義的な政策に舵切りをした時代に執筆された書でもある。

*A Literature of Their Own* は、19世紀から20世紀後半までの同時代作家を論じながら、従来のイギリス文学史では抑圧されたイギリス女性作家の系譜を求め直そうとする野心的な企図のもと執筆された。ヴィクトリア朝作家にやや重きが置かれているものの、本書のタイトルが Woolf の *A Room of One's Own* から取られたことが端的に示すように、Woolf は本書でイギリスの重要女性作家として位置づけられる。そこで Showalter がとくに注目するのが Woolf の「両性具有のヴィジョン」である。Showalter のいう両性具有とは、トランスジェンダーや多様な性という意味ではなく、諦念もしくは妥協的態度を意味する。“The concept of true androgyny—full balance and command of an emotional range that includes male and female elements—is attractive, although I [Showalter] suspect that like all utopian ideals androgyny lacks zest and energy.” それはブルームズベリー・グループの特徴であるとも述べられ、両性具有とはどこかしら妥協の産物を指す。つまり、Showalter は Woolf の——おそらくはイギリス知識人作家たちの——バランス重視の中庸な姿勢を懐疑的に見る。

そうした懐疑的な視点を見せつつも Showalter は、Woolf 作品の分析を通じてフェミニズム批評を展開する。彼女のフェミニズム批評が示されるのは、Woolf の *Three Guineas* (1938) を書評した Q. D. Leavis に言及する時である。「教育のある娘たち」に向けて書かれた *Three Guineas* について、Leavis は、Woolf が女たちの育児や家事に言及しているが、その内実を分かっていないと批判する。Woolf が家事育児を知らないことだけでなく、それらの雑事に従事せねばならない女たちを想定読者から完全に忘れ去っていることを明確に批判する Leavis を、Showalter は評価する。しかし、Showalter の Leavis に関する読解が不可解に思えるのは、Leavis の家事の社会化というフェミニスト的テーマを深化させなかった点である。Leavis の書評には、家事育児の問題を指摘するだけでなく、その解決策として職業を持つ男性の育児の可能性や、さらには、ソ連のような育児の社会化の可能性すらも指摘されている。これらをどこまで Leavis が本気で実現するつもりだったのかは不明ながら、1930年代での指摘としては大いに革新的だ。少なくとも家事育児という無償労働に従事させられていることに疑義を申し立てた第二波フェミニスト世代にとって大いに重要な指摘であったはずだ。にもかかわらず、*A Literature of Their Own* において Showalter は、Leavis のウルフの家事労働への無理解を言及するのみで、育児の社会化の指摘を引用しないし、彼女の先見性を示唆することすらしない。そのうえ最終的には Woolf を擁護する言葉で締めくくる。

以上のように Leavis を経由して Showalter の Woolf 論を分析するならば、両性具有的姿勢を有しているのは Showalter その人である。そうした姿勢によって書かれたイギリス文学史には、当然というべきか、人種や帝国についての言及がほとんどない。そのため、野心的な企図を持って書かれたにもかかわらず、結果としては新たな女のイギリス文学史というよりも既存のイギリス文学史に女性作家が追加されただけのように思われる。つまり、Showalter の冷戦意識とは、フェミニズムのテーマを希求しながら、社会主義的政策の可能性については情熱的に語ることをしないという両性具有的態度である。

ふつうのフェミニストのプロジェクトの継続に求められるのは、おそらく次のようなことだろう。Showalter や Woolf が持っていたような冷戦意識／両性具有的態度を私たちの中にもあるかもしれないことをつねに疑うこと。フェミニズムを希求する私たちにもフェミニズムへの企図を中断させる意識があるのかもしれないと、つねに自分に問うこと。これらを継続し続けることが、フェミニズムを一過性の流行ではなく、「ふつう」のものにする可能性につながるのではないだろうか。